

関連単元名	3人の武将と全国統一	展示コーナー	D	武士の世へ
		資料名	中世後期の群雄分布図	

中世後期の相馬氏

中世を通じて行方郡に加え宇多郡・標葉郡を支配した相馬氏は、第14代当主顕胤（1508～1549）から第16代義胤（1549～1635）の代まで、おもに米沢（山形県米沢市）の伊達氏との戦いを繰り返すこととなる。年数にして約50年、30回余もの戦闘が両家の間で行われた。

相馬義胤と伊達政宗

天正6年（1578）相馬氏第16代当主となった義胤は、当時の伊達氏当主・輝宗と渡り合っていたが、輝宗の嫡子・政宗が天正12年（1584）家督を継ぐと、政宗は二本松の畠山氏・須賀川の二階堂氏・会津の蘆名氏などを次々と攻略し、南奥羽最大の戦国大名となった。

政宗の軍勢は相馬領にも及び、天正17年（1589）には相馬領の駒ヶ嶺城（新地町駒ヶ嶺）・新地城（新地町）が攻略される。その後も義胤は、政宗に攻略された城を奪回しようと試みたが敗北、弟の隆胤や重臣たちが次々と討ち死にし劣勢となった。

しかし、そのころ関白に任命され、全国統一を目前にしていた豊臣秀吉の「惣無事令（大名の私闘を禁止する命令）」は、関東・東北地方に及び、相馬・伊達の抗争も終了した。

豊臣秀吉と相馬氏

関東・東北を除きほぼ全国を統一していた豊臣秀吉は、天正18年（1590）小田原の北条氏攻略の際、東北の各大名に小田原への参陣を命じた。記録によれば当主であった第16代相馬義胤は、同年五月下旬に小田原へ参陣し、秀吉から宇多・行方・標葉三郡4万8700石の領地安堵の朱印状を拝領したという。

関ヶ原の戦いと領地没収

慶長5年（1600）、徳川家康と石田三成の間で「関ヶ原の戦い」が勃発する。当主であった相馬義胤は徳川家康の招きに応ずることなく“中立”という立場をとった。戦後、義胤が三成と親しい（嫡子・虎王は元服する際、石田三成の一字を賜り「三胤（のち密胤・利胤と改名）」と名乗っている）こと、家康と敵対した佐竹義宣と縁戚であること、家康のために積極的に戦に参加しなかったことなどがとがめられ、慶長7年（1602）宇多・行方・標葉の三郡は没収され、相馬氏は断絶の危機に陥った。

その後、義胤の嫡子・三胤は三成から受けた「三」を「密」と改め「密胤」と称し、相馬に縁のある幕府の旗本をつうじて家康の家老・本多正信に相馬家再興の訴状を提出する。その後正信の仲介で家康・秀忠と面会した義胤・密胤親子は旧領三郡の安堵を認められ、近世大名として復帰することになる。



◀ 中世後期の群雄分布図